

春の湊

湊

いつからか、春が嫌いになった。

春の、新たな出会いと生活に期待と不安の入り交じったような、どことなく浮ついた世間の雰囲気から、自分ひとりだけが取り残されているような気分になって、押しつぶされそうになるから。

普通のレールから外れてしまった自分が嫌で嫌でたまらなくて、心のどこかに負い目を抱えているせいで、いつもそんなことばかり考えてしまう。

ネガティブな思考から逃げ出したくて、庭に出て切れかけのライターをカチカチ鳴らす。やっとのことで付いた煙草を一口だけ吸って、憎たらしいほどの快晴を見上げ、煙を吐く。雲ひとつない青空が眩しくて、俯いた。

ボタン、と車のドアを閉める音が聞こえて顔を上げる。丸目の、白い軽自動車の運転席から降りてきたらしい、見慣れた顔と目が合った。

「よお、相変わらず死にそんな顔してんな。」

そんな軽口を叩きながら、Sは近づいてきた。

二三、言葉を交わしてから、まあそんなことより、と彼は続ける。

「車買ったからさ、ドライブ行こうぜ。どうせお前暇だろうし。」

確かに時間の余裕はいくらでもあるが、ペーパードライバの運転は信用できない、事故に巻き込まれて死ぬのは御免だ。という旨を伝えると、Sは

「俺とお前の仲じゃないか。死なば諸共、だろ？」

そう言っただけで笑った。それも悪くないな、と思った。

完全にノープランのドライブに出かけた私たちは、あてもなく走りながらどこへ向かうか話し合った。結局、こういう時は海に行くのが相場だろ、というありきたりな結論に至って、Sはぎこちない手つきで右折した。

桜も散り終えた晩春の、麗らかな日和の風が、半分下げた窓から吹き込んできて気持ち良かった。sはハンドルを握りながら、どうせお前は知らないだろうから、と共通の友人たちの近況を話し始めた。

中学の同級生同士が結婚したとか、高校の後輩がどこそこに内定を貰ったとか、保育園から一緒のアイツはいま船の仕事でハワイにいるらしいとか、そんなことをsはいくつも教えてくれた。どこから聞いてくるんだ、と尋ねると、TwitterやらInstagramの投稿を見ているらしかった。随分現代的な風の便りだな、という変な感想が浮かんできた。

いつものマシンガントークに適当な相槌を打ちながら、案外みんなうまく暮らしているものなんだな、と思った。それぞれ抱えている問題はあっても、なんとかして日々を過ごしているのだろうに、私は、という暗い考えがよぎって、それ以上頭を使うのを止めた。

ニコチンが切れてきたのを自覚して、sにコンビニに寄って欲しいと頼んだ。助手席を降りて軽く背伸びをした後に、二人分の缶コーヒーを買ってきて、灰皿の前で手持ちぶさたにしているsに声をかけてから投げつけた。

「気が利くじゃん、サンキュ。」

そう言ったsが一向に煙草を取り出さないのを見て、吸わないのかと尋ねると、金欠だから禁煙しているとの事だった。気の毒に思っ、ソフトパッケージの箱から一本取り出して渡してやった。

「同じ銘柄だと、こういう時いいよな。」

sは笑いながら言った。好きな銘柄を彼に薦めたおかげで、私たちは共通の煙草を吸っていた。どちらか一方が切らしたときに、いつもと同じものを吸えるように、という魂胆だったが、専ら彼に恵んでやるばかりだった。

そんなのが禁煙しているのが気になって、彼女でもできたのか、と冗談めかして言った。そのことなんだけど、ちよっと相談したくて、真剣な顔で告げたその言葉を聞いて、吸っていた煙草の火を揉み消した。

再び海へ向けて運転を始めたsは、しばらく走ってから漸く、好きな女性がいる、と口を開いた。

曰く、なんとなく変わりがたくて始めたマッチングアプリで、同い年の女性と知り合った。話してみると、共通の知り合いがいた事や、趣味がよく似ていることが分かって、意気投合し仲良くなった。まだ付き合っていないが、今では毎日のように連絡を取り合っていて、会える日が楽しみでしようがない、との事だった。

少し自慢げに話すの顔を見て、素直な祝福の気持ちに、ほんの少しの嫉妬を込めて、おめでとうと言った。

ただ、色恋沙汰には明るくないから何か聞かれても分からない。そもそも殆ど惚気話だっただろう、本当に相談する気はあるのか。そう続ける私に、^のは笑いながら悪いな、と謝った。

まずお前に報告したくてさ、という言葉に、悪い気はしなかった。それでも、どこかモヤモヤした気持ちを抱えている自分に気がついて、これ以上考えまいと景色に目をやった。リアス式海岸の最南端、太平洋に突き出した半島の尾根を走る道からは、木々の間を縫うように、遠くの波に日差しが反射するのが見えた。

昼前の、人気のない小さな漁港の隅に車を停めた。

湿った風が運んでくる、慣れ親しんだはずの潮の香りが、いやに鼻についた。

真新しい防潮堤に二人で並んで腰掛けて、何もするでもなく、延々と打ち寄せる波を見つめる。いつもなら気にならない沈黙に耐えられなくなって、ポケットの煙草に手を伸ばした。煙で空白を紛らわして、少しでも長くこの瞬間を共有していたかった。そんな気持ちとは裏腹に、火を付けようとしたライターのはなくなくなって、カチカチと虚しい音を鳴らすばかりだった。

^のの方を向くと、何も言わずに片手を風避けにして、昭和の付き人みたいな姿勢でライターを構えていた。思わず口角を上げてしまつて、啞えた煙草を落としそうになつてから、顔を近付けた。

火を付けて貰う間に、さつき感じたなんとも言えない感情について思いを馳せた。

結局のところ私は、このぬるま湯のように心地良い^のとの関係から抜け出せずに、一方的に依存していただけだったのだろう。

無二の親友だったはずの私も、私が無意味な日々を過ごして、漠然と若さを浪費し続けている間に、河の流れのように変わってしまった。今まで過ごした日々の思い出ごと、このまま私を過去へ置いていってしまうような、そんな気がした。

傷付くのを恐れて、自分に言い訳を続けて、自発的な変化から逃げ続けた私が悪いだけなのに、勝手に裏切られた気分になっているのに気がついてしまって、そんな自分が気持ち悪くて、どうしようもなく惨めになった。

思い切り煙草を吸って、肺いっぱい詰めた煙草ごと、抱え込んだそんな感情を吐き出そうと努力した。口から伸びた白い靄は、潮風に吹かれてかき消されていく。

ボンヤリと水平線を眺めるのの横顔を流し見ながら、このまま時間が止まってしまえばいいのに、と思った。